

2025年7月13日 礼拝説教要旨

ヨハネによる福音書講解説教44「あなたを罪に定めない」

エレミヤ17：9～13、ヨハネ8：1～11

神殿の境内でイエスさまが人々に教えておられた時でした。突然、姦通の現場で取り押さえられた女性が引きずられてきました。聖書ではさらっと書いてありますが、それは凄まじい光景だったと思います。姦通の現場で捕まった、言わば現行犯です。おそらく着の身着のまま、髪も振り乱し、恐怖に怯える女性を律法学者、ファリサイ派の人々が引っ張ってきた。女性は泣き叫んでいたかもしれません。あるいは声も出せず、下を向いてただ恐怖におののいていたかもしれない。姦通罪は死罪です。この女性は自分が殺されると思っていたでしょう。そして大勢の群衆の真ん中に立たされるのですから、それは屈辱的な状況でした。女性に対して律法学者たちはまるで鬼の首を取ったように言います。「先生、この女は姦通をしているときに捕まりました。こういう女は石で打ち殺せと、モーセは律法の中で命じています」（4～5節）と。裁く側と裁かれる側、はっきりとした構図がここに浮かび上がっています。皆さんはこういう場面に遭遇したらどうでしょうか。

今日でも同じような場面を見ることがあります。ニュースや新聞でも犯罪を犯した人が逮捕される。裁判で有罪が確定する。悪いことをしたのだから当然だ。自業自得だ。その時にわたしたちは裁く側にあります。人を裁くのは、自分は正しい、間違っていないと思うからです。自分の方がまだマシだと思うのでしょうか。特に裁かれる人が高い地位にあると、それこそ鬼の首を取ったような気持ちになります。どんなに偉い人も叩けば埃が出る。あんな有名人も失敗するんだと思うと逆に安心したりする。だから政治家や芸能人のスキャンダルを見て内心喜ぶのです。週刊誌やワイドショーの類はそういう人間の心理を利用しています。ちょっとした失敗や過ちも取り上げて、優越感に浸ろうとするのです。けれども人の失敗を見て、自分が勝ち誇ったり、自分の正しさを確かめるのは健全なことでしょうか。そういう心の歪みのようなものに気づくでしょうか。

この出来事を取り囲んでいた人々も、人を裁く側に立ち、優越感に浸りながら、自分はその人のようにならないで良かったと胸をなでおろしていたのではないのでしょうか。そしてイエスさまも同じようなお気持ちだろうという期待もあるでしょう。ところがそのような期待が完全に裏切られます。「石で打ち殺せ」といきり立つ者と一緒になって騒ぐのではない。イエスさまは、裁く側に立ち、優越感に浸るわたしたちをそこから引きずり下ろしておしまいになります。しかも力で引きずり下ろすのではない。自らその座を退くようにならざるを得なくなるのです。

その時、イエスさまはかがんで地面に指で何かを書いておられます。何を書かれたのか。それはわかりません。ですから推測でしかないのですが、昔から一つの御言葉が言われています。それは先ほど読みましたエレミヤ書第17章13節です。「イスラエルの希望である主よ。あなたを捨てる者は皆、辱めを受ける。あなたを離れ去る者は、地下に行く者として記される。生ける水の源である主を捨てたからだ」なぜこのエレミヤ書の箇所が取り上げられたのか。ここに「生ける水の源」とありますので、それが第7章にあった「渴いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい」ここにある「生きた水」（7：38）とつながっている。それが理由ではないかと言われます。

しかし、それよりもこのエレミヤ書には「あなたを捨てる」(17:12)という言葉が繰り返されます。イエスさまが沈黙の中でわたしたちの何を問題にされていたのか。それは神さまを捨てて、自分が神になる。自分が裁き主になるということではないでしょうか。確かに人を裁く時に、わたしたちは神さまを忘れています。神さまの御前にあることを忘れている。それどころか、神さまを捨て、自分が神になって、神さまを差し置いて裁くような気持ちになっているのです。そういう驕りをここでイエスさまは打ち砕かれるのです。

何よりイエスさまが地面にかがみ込んでいる姿が印象的です。ここには「かがむ」と訳された言葉が二回繰り返されています。大の大人が地面にかがんで何かものを書くということはほとんどないと思います。でも昔、小さい頃はよくありました。棒切れで丸ばつをして遊んだり、相合傘を書いて友だちを冷やかしたり。イエスさまが身をかがめて地面に何かを書かれるのは、それこそ小さくなって、幼子のようになってくださった。人を裁いて優越感に浸る大人ではなく、自らを低めて、へりくだられる。このかがんだ先に何があるか。十字架があります。

イエスさまは、この女性を裁こうと躍起になっている人たちに言われます。「あなたたちの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい」(7節)ところがこの女性に石を投げつける者はおりませんでした。年長者からひとりまたひとりと出て行った。それは真の裁き主の前にこの女性を立たせることになりました。「イエスひとりと、真ん中にいた女が残った」(9節)それは終末の裁きを示しているのかもしれませんが。終わりの日にわたしたちはイエスさまの御前にひとり立つのです。けれどもその裁き主であるイエスさまが「わたしもあなたを罪に定めない」(11節)と言われました。どうしてでしょう。

それは、彼女が受けるべき裁きをイエスさまがあの手で引き受けてくださったからに他なりません。彼女が血を流すのではなく、イエスさまが代わりに血を流された。それによってわたしたちは赦されたのです。「神はこのキリストを立て、その血によって信じる者のために罪を償う供え物となさいました。それは、今まで人が犯した罪を見逃して、神の義をお示しになるためです」(ローマ:25)ですから、決して姦通の罪を軽く見ているのではありません。その罪の責任をイエスさまが負われたのです。

それからイエスさまは女性に「行きなさい。これからは罪を犯してはならない」(11節)と教え諭されます。新しい出発がここに約束されています。赦された者はその赦しに甘んじるのではありません。もう罪を繰り返さない、新しい歩みを始めます。ここに「身をかがめる」と同様「身を起こす」という言葉も二回繰り返されます。身をかがめるのが十字架であれば、身を起こすはよみがえりでしょう。わたしたちはイエスさまのよみがえりにより、その命にあずかって、もう罪を犯さない新しい歩みを始めています。

天の父よ。本当の裁き主を捨てて、自分が神になろうとする傲慢をお赦してください。何よりそのためにイエスさまが来られ、身をかがめて十字架におかかりになられました。本当ならば、わたしたちが裁かれなければなりませんのに、イエスさまが裁きを引き受けてくださいました。その赦しを感謝して受け入れる者とさせてください。主の御名によって祈ります。アーメン。